［課程−２］

審査の結果の要旨

氏名　長谷川（田中）若恵

本研究は本邦の入院診療の DPC（Diagnosis Procedure Combination）データベースを用いて、入院を要した好酸球性多発血管炎性肉芽腫症患者の在院死亡を検討し、それに関連する危険因子の解析を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 年齢 65 歳以上、入院時に腎疾患を有する、心疾患を有する、消化器疾患を有する、耳鼻咽喉科疾患を有さないことをそれぞれ 1 点として独自の重症度スコアリングを行ったところ、重症度が高いほど在院死亡率が高かった。
2. 入院時に末梢神経障害を有する患者は有さない患者と比較して、入院２日以内の免疫グロブリン静注療法とステロイドパルス療法が多く施行されていた。
3. 対象患者は 2,195 名で 97 名(4.4%)は在院中に死亡していた。多変量ロジスティック回帰分析を行った結果、在院死亡と相関する因子は 年齢 65 歳以上、男性、入院時の意識混濁、予定外入院、入院時併存症として肺疾患・心臓および脳血管疾患・腎疾患・敗血症・悪性疾患を有すること、そして入院時末梢神経障害を有さないことであった。

以上、本論文は本邦の入院診療の DPC データの解析から、入院を要した好酸球性多発血管炎性肉芽腫症患者の在院死亡の危険因子を明らかにした。入院時に評価可能な因子を用いて在院死亡を予測した報告は過去になく、本研究の結果は好酸球性多発血管炎性肉芽腫症患者の重症度や治療を検討する上での重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。